

ゼミ課題 エッセイ

北海道大学経済学部経済学科 多賀俊明

『風土—人間学的考察—』 和辻哲郎

この本を読み進めているうちに、私が求めていた答えがこの本の中にあると感じた。

なぜそう思ったのか。どちらかといえば直感的な感覚であったので言葉にするのは難しいが、私の歴史好きな点と密接に関係していることは確かである。

私は歴史が、特に世界史が昔から得意だ。高校の頃に世界史と出会ってからは毎日暇さえあれば資料集と地図帳を眺めていたぐらいだ。

世界史とは、所謂欧米化の歴史である。それぞれの民族・文化に優劣など存在しないが、世界史の形成がそのようになされたことは紛れもない事実だ。歴史的に見ればヨーロッパが常に世界のトップにいたわけではなく、むしろ中国やインド、イスラーム国家にその領域を脅かされ続けていた。がしかし、地域によって程度に差はあれ経済的なシステムやファッション等の文化面で世界共通の認識を植え付けさせたのは欧米である。

そしてここで私に1つの疑問が生じた。なぜ大国であった中国やインドではなく、欧米が世界の中核として近代以降君臨し、今もなおその地位をどこにも明け渡すことなく君臨し続けているのか。また、経済・産業(これ自身が欧米的概念に則った考え方ではあるが...)の発展の仕方に地域によってこれほどまでに差が出るのかということである。

この答えが『風土』の中にはある。私自身気候に着目して自分なりに考えたことはあったのだが、私の浅はかな知識では到底解決には至らなかった。ただ自分が着目した点は間違いではなかったことが本書で証明されて嬉しくもある。

「人間存在の構造契機としての風土性を明らかにする」この言葉に私は衝撃を受けた。自然環境と人間が独立に存在しているのではなく、その2つが相互に影響しあう前提があって初めて1つの存在を規定しているという考え方が、正直最初はうまくイメージできなかった。ただこの部分を読んで、高校時代に国語の教科書で内村節著の『この村が日本で一番』という本を読んだことを思い出した。上野村というところに住む老婆はほかの地域には一歩も足を踏み入れたことのない人でありながら、この村が日本で一番だと断言した。多分そこにはその村で自分のアイデンティティが形成されその村と共に自分が成長してきたからであろうが、人間存在の構造契機としての風土性をというものはこう言うことなのであろう。

人間存在の風土性を明らかにするために、モンスーン(インド・南洋)・沙漠(中東)・牧場(ギリシア・ローマ・西欧)の3つに分けて、その地域の民族・文化・社会の特質を規定していった部分は極めてわかりやすく、それが今日の世界諸国の関係につながっているのだと私を納得させてくれるものであった。特に中国・日本にはもう少し突っ込んだ考察がされていて、中国人のあの何とも言えない性格をよくこうもうまく文章にできるものだと感心してしまった。確かに同じ東アジアの国といえども友好的な関係をうまく築けない理由が大いに理解できる。地理的距離と同様に歴史的距離も近いのに、考え方が違いすぎるのだ。しかしその違いがなぜ生じているか、何がそのような違いをもたらしたのかという人間の本質的な構造に着目しなければ、理解することは不可能であるし、友好的関係を築き上げることも難しい。

世界史の理解度はこの本のおかげで今後さらに深まるのではないかと考えている。『風土』は世界史をよりよく理解するための方法を多少難解ではあるが教えてくれるはずだ。

『若きウェルテルの悩み』 ゲーテ

多分私は不幸である。

晩年、詩人は「もし生涯に『ウェルテル』が自分のために書かれたと感じるような時期がないなら、その人は不幸だ」と語った。

と表紙に書いてある。思い当たる節がない。というよりまず私がウェルテルと同じ立場にあったなら、すぐ諦める。確かに、自分の好きな人に付き合っている人がいたとしても結婚していなければ、すぐ諦めるようなことはしないかもしれない。だがウェルテルの想うロッテは婚約者がいる、作中では結婚までしている。夫であるアルベルトがとても嫌な人物でそこからロッテを救い出すといった話であればどれだけよかったことか…。アルベルトはとても良い人物である。これではどうしようもない。なぜ諦めようとしないのであるか。しかも拳句の果てにウェルテルは自殺してしまう。何とも救いようのない話である。

この小説はゲーテ本人の体験をもとに書かれている。しかしゲーテは自殺しない。ただゲーテの友人のエルーザレムという人物が人妻に叶わぬ恋をし、最後自殺を遂げてしまった。ゲーテとエルーザレム二人がウェルテルのモデルとなり、本書は誕生した。本書は第2部中盤までウェルテルが、友人ウィルヘルムに当てた手紙そのままの内容になっていて、感情移入してしまう人はかなりのめり込むことになったのではないだろうか。それが熱狂的な『ウェルテル』ブームを巻き起こした1つの所以であろう。私自身は感情移入できなかったこともあってか、第2部中盤以降からの編者の解説付き文章が始まるまでなんとなくの感覚で読み進めていた。後半の解説のおかげで本書（というよりウェルテルの心情）を頭では理解することができた。かつなぜこれほどまでに人気が出たのかもわかった気がする。

ウェルテルは自分に正直すぎる。立場をわきまえなくてはならぬと本に向かって憤りを感じたこともしばしば。でも現実世界ではそのような自分に正直な感情を抑え込んで生活しているはずだ。だからこそ本の中でも自分に正直に、どんなに格好が悪くても自分の思うままに女性を想い、自分のものにしたいという欲望を前面にさらけ出したウェルテルが当時の読者の目に輝いて映ったのではないだろうか。これは私の勝手な想像だが、当時のヨーロッパも今ほどには個人の自由はなかったのではないだろうか。それは法律的なことだけではなく、精神的な生活にもおいて。だから皆ウェルテルに共感し、自殺まで真似る人が続出するという一大事件にまで発展してしまったのではないか。

このような、束縛の多い現実世界に生きる人々の精神的開放の拠り所となる作品として『ウェルテル』があり、ウェルテルの人格があることには、私は肯定的に捉えることができる。実際にウェルテルのような人がいたら話は別だが。

本といえども私はロッテのことは好きではない。 思わせぶりの態度をとるからいけないのだ。このままではいけないと思うタイミングも遅すぎる。一旦思わせぶりの態度をとったにもかかわらず、ウェルテルが自分の気持ちをもう抑えられなくなってから距離をとろうとする。ウェルテルのことが気の毒で仕方がない。かわいそうである。本の中にも、ロッテにとってウェルテルはもうなくてはならない存在であると書いてある。だがそれはあくまでも友人として。ウェルテルの気持ちを知らながらそれをロッテは望む。なんと虫のいい話ではないか。

アルベルトは読者を現実世界に引き止める役割を担っていると私は考えた。アルベルトはウェルテルの対比として書かれている。このバランスがまた、『ウェルテル』を一部の熱狂的な支持者だけでなく万人に支持された所以ではないだろうか。

現実の世界ではウェルテルのように自分に正直には行動はできないかもしれない。しかし誰にもウェルテルのような純粋な心を持っているはずである。それが内に秘められていることも忘れずに生活するだけでも心豊かな生活を現実で送ることができるであろう。

『月と六ペンス』 モーム

3冊の中で1番量は多かったが1番読みやすくもあった。一つは評論、もう一つは小説ではあるが読みきれない。その中で一番私が慣れ親しんだ形態の小説に近いものがこの『月と六ペンス』だった。ポール＝ゴーギャンをモデルとして書かれているらしいのだが、ゴーギャンを良く知らない私にとって、初めはあまり理解できずに読み進めてしまうのではないかと考えていたのだがそんなこともなく、気が付いたら読み終えていたという感覚だった。

本書の主人公であるチャールズ＝ストリックランドは変人の中の変人。安定して幸福な地位と家庭を捨ててまでただ絵に没頭し、世間の反応には徹底的なまでの無関心という変人ぶりは常軌を逸している。生理的欲求はあるにはあるが、満たされる環境があればそれでよし。なくても別に気にしないという、欲求さえにも無関心である。

本書はストリックランドの生涯を、作家でありストリックランドの友人である「私」の一人称という視点で書かれている。「私」も大いにこの変人ストリックランドの人生には興味をそそられ、ストリックランドを追っていくのだが、私も劇中の「私」を通してストリックランドを追っていた。それほどストリックランドがどのような人物であるかが気になっていた。ストリックランドはロンドン、パリ、マルセイユ、タヒチと場所を変えて、徐々に自分が求めている何かに迫っていった。晩年ストリックランドの描いた果物の絵を目にしたとき「私」は、

「魔法をかけられた果物。味わえば、どんな魂の秘所と、どんな不可思議な想像の世界への扉が開かれることか。今、それは待たれざる危険を孕み、不機嫌に黙り込んでいる。これを食べるものは、けだものになるのか、神になるのか。およそ健全で自然なるもの、事物間の幸せな関係を欲するもの、素朴な人間の素朴な喜びを望む鑄物は、狼狽して、この果物から尻込みする。だが、恐怖に満ちた魅力がある。知恵の木になる果物のように、それは未知なる多くの可能性を含んでいて、恐ろしい。」(p.389)

この文章の直後、「私」は、「ストリックランドめ、墓まで秘密を持って行ったか」と感じたわけである。その恐ろしい何かにストリックランド自身は晩年を過ごしたタヒチでとうとう会うことができ、それを描き出すことに成功したが、それが何ですごいのかは類まれな才能を持つ芸術家でも表現ができなかった。そして結局ストリックランドが追い求めたものもとうとうわからなかった。しかし逆に言えば、ストリックランドがそれだけ偉大な芸術家であることを証明しているのではないだろうか。

妻をストリックランドにとられ、挙句の果てに妻を殺されてしまったストループはどれだけストリックランドに嫌なことをされたか、この本を読んだ人にならわかることだろうが、それでもストループがストリックランドの才能をいつまでも愛し続けたのも、ストリックランドが偉大な芸術家であったからにはほかならないのであろう。人としては最低な層ではあるが...

ストリックランドの偉大さは最後まで読まなければわからない。死ぬ間際まで自分の追い求めるもののために一途に、正面から芸術と向き合いそれを叶えた男がどれだけかっこいいのだろう。私も何か1つのことに没頭することを人生の中で一度はしてみたいと思う。そうすれば新たな自分を発見できるかもしれない。